

タブマネってこんな人

① 国際交流ひらかわの風の会 岡 孝則



タブマネ28期生（令和2年）の岡です。県庁退職して山口県国際交流協会には、事務局長6年、業務担当（任用職員）として2年勤務し、今年の3月末に退任しました。タブマネは、事務局長最後の年に認定いただきました。動機は、国際交流活動歴が20年以上もあるので、退職後の第3ステージで実践的な活動を考えていました。

現在は、市民活動団体「国際交流ひらかわの風の会」の総合アドバイザーとして、これまでのノウハウや人脈を生かして活動を行っています。

特に力を注いでいるのが難民の救援です。一昨年8月イスラム主義組織タリバンが政権を掌握するアフガニスタンから、救援を求めてきた地元大学の元留学生とその家族6人をパキスタン経由で山口県内へ退避させて1年になります。関係省庁や協力機関と交渉力を生かしながら、街頭募金活動などで資金集めやビザ取得、就職などに奔走しました。これらが円滑にできたのも協会時代の人脈やノウハウのおかげです。

現在は、小学校や保育園との調整、夫人の日本語教育など、一日でも早く安定した生活が送れるように、風の会の仲間たちや就職先の社長家族と一丸となって支援しています。夫人が第5子を妊娠したという連絡があり、新たな課題が発生しましたが、日本人とアフガニスタン人の生活感の違いを感じる場面です。多文化共生マネージャーとして責任をもって見届けるつもりです。

外国人住民にとって安心安全で住みやすい所になるよう実践的多文化共生の地域づくりに邁進していきたいと思っています。

② NPO 法人にほんご豊岡あいうえお 岸田 尚子



志を同じくする仲間と平成 24 年 12 月に NPO 法人にほんご豊岡あいうえおを立ち上げました。本格的に活動を始めた平成 25 年度に多文化共生マネージャー養成コースを受講しました。NPO 法人設立を機に多文化共生マネージャー養成コースを受講したいと思ったのではなく、豊岡市や豊岡市国際交流協会という組織の中で 20 年余り国際交流及びに草の根交流に取り組む中で、専門的な立場で地域における多文化共生を推進したいと思っていたからです。

NPO 法人設立したことにより、自分たちの活動の拠点ができ、外国人市民が気軽に集える居場所ができました。「何かあったら来てね」ではなく、「何もなくても来てね」を合言葉に活動をしています。まずは地域に住んでいる私たちと顔の見える関係を築き、地域とも顔の見える関係が築かれ、互いに助け合える関係ができたらいいなと思っています。

豊岡市では「多文化共生プラン」が令和 3 年度に策定され、外国人市民を貴重な人材、地域コミュニティの一員として受け入れて共生し、地域の活性化につなげていく必要があると言われています。また、豊岡市はコウノトリとの共生に取り組んでいます。多文化共生マネージャーの研修では、「多様な生物が暮らす但馬に”ひとのダイバーシティ”を加えよう」というテーマで 3 カ年の計画を立てました。まだまだ志半ばですが、言葉だけで終わることのないよう、多文化共生マネージャーとして自らの専門性を高め、取り組んでいきます。今後ともよろしくお願ひします。

お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りくださいね。

※但馬は豊岡市を含む 3 市 2 町のことです。

③ 鹿沼市国際交流協会 江崎章子

2010 年度に研修を受けたタブマネ 11 期です。栃木県の鹿沼市国際交流協会に勤務しています。

2009 年度に市職員である職場の先輩がタブマネになったことをきっかけに、市は多文化共生プラン策定に向け動きだしました。私はプラン策定に関わりながらタブマネの研修を受けることができました。そのような機会に恵まれて私は幸運でした。

多文化共生プラン策定に伴い、「鹿沼市多文化共生コミュニティセンター」が開設され、今年 2 月、センターは開設 10 周年を迎えました。10 周年のセレモニーと同時に開催したイベントでは、多くの方が国籍を問わず楽しそうに交流している様子を見ることができ、とても嬉しく思うと同時に、色々な方に支えられた 10 年だったと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

タブマネになり良かったと思うことは、全国に仲間がいるということです。何か新しいことを始める時、困った時、迷った時に相談すると、活動例や意見、アドバイスをたくさん聞くことができます。

また、活躍されているタブマネの様子を知ると、自分も頑張ろう、という気持ちになります。

今、力を入れていることは、「みんなが楽しく交流できる場や機会をたくさん設けること」です。それにより、お互いのつながり（連携）が強くなり誰もが住みやすいまちになると考えるからです。

これからも、全国のタブマネや地域の方々の力を借り、一步ずつ着実に頑張っていきたいと思います。



④ グローカル人財ネットワーク 理事 近藤 正憲



私は1992年の夏にハンガリーへの派遣を皮切りに、ヨーロッパ、中東、中央アジアで日本語教育（JICA、JFの事業）に携わってきました。日本語教師として何回目かの海外勤務を終えて日本に帰ってきたとき、これまで外国人、外国文化との接点の多い自分には、日本の多文化共生社会実現に何らかの貢献ができるのではないかと考え、2018年の秋、タブマネの門をたたいた次第です。

タブマネの養成研修では多文化共生に取り組むホットな現場の見学をさせていただき、非常に深い内容の講義と、熱い心をお持ちの皆様のお話を聞かせていただき、大変感動したことを覚えております。

現在は京都でいくつかの大学で授業を持ちつつ、日本語教師の養成に関わっておりますが、タブマネの研修で知り合った同期（26期）の尾本勝昭さんが代表理事を務める一般社団法人「グローバル人財ネットワーク」で、外国人留学生の日本国内、特に広島県内での起業の応援をしています。これまで塾生5名、フェロー8人の支援をしましたが、念願の起業を果たし、外国人材ビジネス、多文化学童保育事業を行っている人もいます。

私は、教育関連の事業で活動している塾生の一人と日本語教師養成の分野で協力して仕事をしています。今後は外国籍の日本語教師を育てることと、日本国内の一般の方に「やさしい日本語」を普及させることを目標に活動してまいりたいと思っております。

⑤ 特定非営利活動法人 安芸高田市国際交流協会 稲田 幸久



(特非) 安芸高田市国際交流協会の事務局長として、日々、外国系市民がより住みやすいと感じてもらうにはどうすればいいか、頭を悩ませながら活動しています。ちなみに、タブマネ 29 期生です。熱き志を持った同期に、刺激を受ける毎日です。

安芸高田市国際交流協会は、使わなくなった公共施設(全国的にも利活用が問題になっている青少年自然の家)を、技能実習生等の住居として運営しています。住んでいるのはインドネシア人 23 名(2023 年 7 月 31 日時点。女性 21 名、男性 2 名)。彼女たちにとって「家」となる場所なので、どうすれば居心地がいいと感じてもらえるか……。 「文化の違い」や「若い男女がなにを考えているか」に配慮しながら、よりよい運営形態を築けるようトライ&エラーを繰り返しています。その甲斐あってか、彼女達も「日本での生活は楽しい」と言ってくれます。安芸高田市で暮らす外国系市民のうちのわずかかもしれませんが、彼女たちが日本を好きになってくれることで、他の人にも楽しさが伝わってくれたらな、と思っています。

ただ、住居の運営を始めた年が、新型コロナウイルス感染症の流行と重なったため、施設を利用してのイベントがあまりできていません。本来であれば、外国系市民が気軽に集える施設にすべき場所だと思います。これからの活動で、外国系市民も日本人も、みんなが一緒になって楽しい時間を過ごせるような、そんな場所にしていきたいと考えています。

⑥ 鴨川市国際交流協会 山口 紀子

私がタブマネになった動機は、ボランティアとして日本語指導を続ける中で、外国人支援や共生の必要性を常日頃感じていたからです。



平成 7 年に日本語教室の立ち上げと同時に、私自身も日本語指導ボランティアの活動を始めました。しばらく違う分野の仕事をしていましたが、平成 21 年に、国際交流協会の事務局になったとき、国は「多文化共生」を推進し、県内では新たに「災害時の外国人支援」の取組みが始まっていました。

そんな中、千葉県から JIAM の災害時外国人支援のセミナーの照会があり、講師は阪神淡路大震災で外国人対応された方と知り、参加すると即答しました。考えてみると、更新との出会いは大きく、加えて、日本語教室や交流事業で、多くの外国人と出会い、多文化共生の必要性を感じ、使命感があったのだと思います。

○タブマネとしての活動状況

令和元年房総半島台風での外国人対応から、災害時外国人支援の重要性を近隣の国際交流協会と語り合うことができ、昨年度の災害時外国人対応サポーター養成講座の際には、実際に近隣市民が参加してくれました。

また、新型コロナウイルスのワクチン接種の通知文には、外国人向けの QR コードを付けてもらい、外国語ページに飛ぶようにするなど、市と連携することができたのは、タブマネの仲間が惜しみなく教えてくださったお陰です。

○タブマネを目指す皆さんへ

1 人で多文化共生を推進させようとしても、なかなか理解されないことが多く、へこんでしまうことがあると思います。①タブマネマインドのある人を見抜き、タブマネ研修や多文化共生に関わる研修に行ってもらい、語り合い、仲間を増やすこと。②事業実施後は、報道提供すること。③それをコツコツ、コツコツ続けていくこと。

実は、このコツコツ続けることは、私自身に言い聞かせていることでもあります。10 年経つと、周りが変わっていきます。

⑦ 下関市国際課 波平 優子

タブマネ 29 期生の波平です。下関市役所の国際課で韓国語の通訳をしています。

私は在日韓国人 3 世で日本国籍に帰化するまでは日本でも「外国人」として暮らしてきました。また、韓国と台湾に留学したことから、海外でも「外国人」としての立場を経験し、たくさんの人に助けていただきました。

本来の業務は韓国との国際交流における通訳ですが、2020 年に国際課内に多文化共生推進室ができた時、今度は『自分が異国の地で暮らす外国人住民をサポートすることができたら』と思い業務の補助を志願したことがタブマネの研修を受講するきっかけとなりました。

研修では多文化共生分野の第一線で活躍されている方々の話や全国の先進事例を知ることができ、同じような仕事の悩みを抱え日々頑張っている同期の方々と出会うことができました。

29 期はコロナの影響で後期の研修や認定式は残念ながらリモートとなってしまいましたが、今でもグループチャットで自分の地域の活動を報告しあったり色々な事例の相談をしたりと繋がりは続いています。全国に仲間がいるのはとても心強いことです。

下関市では庁内での多文化共生の意識啓発として昨年度窓口担当の関係課職員を対象に「やさしい日本語」職員研修を実施し、研修の成果物として主に庁内窓口において使用される行政用語をやさしい日本語に言い換えた用語集を作成しました。今年度からは新規採用職員研修に既存の多文化共生の科目に加え「やさしい日本語」の研修も行われることになりました。

また、災害時における日本人住民と外国人住民の「共助」の体制を平時から整え、地域住民の防災及び多文化共生のまちづくりについての意識を啓発することを目的として 10 月に自治会と実習生の皆さんと一緒に参加する防災訓練を行います。

これからも日本人住民と外国人住民の「顔の見える関係づくり」を進めていくために地域の企業や自治会、日本語教室など様々な団体と連携を取りながら一歩ずつ頑張っていきたいと思います。



⑧ 横浜市国際学生会館 大隈 聡子



こんにちは！私がタブマネ研修を受けていちばん自分に必要性を感じたのは、「数値化」と「言語化」です。どちらかというとな方苦手ですが、研修のお陰で少しは気にするようになりました。

もともとの私は（今も）、スポーツでいうと『スラムダンク』の桜木花道のように、「能書きはいらぬ。目の前の課題を日々こなしていただく」というような、データ分析よりもがむしゃらに進んでいく日々でした笑。

私がいる横浜市国際学生会館は、世界中からの留学生が100人以上住んでいるところで、年代もバックグラウンドも、日本社会との関わり方もさまざまな人々です。日々私が感じている課題の一つに、その人々が地域へ溶け込み、地域社会で活動・活躍していくきっかけ作りがあります。

「タブマネ」の活動として何一つ自信をもってこれをやっています！と言えるようなことはありませんが、日頃から（というより幼少の頃から）日々行っていることがあります。

これが結構役に立ち、効果もあります。ウロウロする、寄り道をする、そして道端でおしゃべりをする、です。出勤前後の駅と学生会館の往復も重要で、「学生会館の大隈」より、道を歩いている1人のお姉さん（笑）の時のほうが、留学生や周辺住民のみなさんとの話が弾み、心を開いてもらえることも多いです。

これからも町を流れる水路の水のようにあっちとこっちをつないでいきたいです。みなさんの場所も、ぜひおジャマさせてください！

⑨ 岡山県国際交流協会 業務執行理事 福本 正弘



「岡山の福ちゃん」こと、福本です。29期のみなさん、お元気ですか？

私は好奇心旺盛で、毎年新しいことに取り組み90歳で詩を書き始めた詩人の柴田トヨさんを見做っていますが、2021年の挑戦が「タブマネ」でした。

現職4年目ですが、着任時に右も左も分からず、情報がない中、まずは「つながる」「協働」「情報収集」のために、県内の関係団体等を訪ねるとともに、中国地方の各県国際交流協会の事務局長さんに声掛けして、毎月のZOOM会議を始めました。コロナ下で顔を合わせることが困難な時期でしたが、1年後には懇親会をするような局長同士のホットなつながりができました。その中で、山口県のO先輩から薦められ、背中を押されたのが、タブマネでした。

JIAMの研修で濃い同期メンバー40人とつながることができ、研修後もLINEグループで情報交換し、研修や会議などで顔を合わせると旧交を温め、困りごとがあると気安く相談に乗ってくれます。

去年は、中四国ブロックの多文化共生フォーラムを岡山国際交流センターで開催していただき、本番はもちろん、コロナで2年越しとなった事前の打合せ等も含め、先輩タブマネのみなさんともつながらせていただきました。

今年の挑戦は、日本語教育の資格取得です。仕事を抜けての受講ということで、数年かけての長期計画となりますが、4月から岡山大学副専攻コースに通い始めました。日本語教育を通じて外国人住民と地域で直接つながっていければと思っています。

人のつながりって、人から人へ、人が人を呼んで次々と増殖していくんですね。そして、情報もついてくる。事業連携にも結びつく。タブマネはそんな化学反応を一気に作り出してくれます。

当センターの職員にも強く薦めています。タブマネのネットワークは本当に素晴らしいと実感しています。この記事をお読みいただいているあなたも一緒にしませんか。

⑩ 公益財団法人 福井県国際交流協会 主事 飯田 隼人



タブマネ研修を受けたきっかけは、多文化共生の現在地を知ることでした。自分の現在地と全国状況などを知れたらと思い参加しました。結果、全国各地から事例や経験談を持ち寄って談議する時間というのがとても濃密で、同じ方向を向いて取り組む仲間がいることを再認識し背中を押された機会となりました。

いつも心掛けていることは「前よりもより良くすること」です。自分が携わった事業でより良くなったかなあと思う取り組みを2つ紹介します。

(1) ふくい外国人コミュニティリーダー事業

外国人コミュニティリーダーによる生活・災害情報の伝達を目的に始めた事業ですが、現在ではそこから波及してリーダーたち自らが情報収集・発信を行うようになり、地域の清掃活動や雪かきなどの奉仕作業に参加するようになりました。

(2) 「外国人支援団体メディアサポふくい」の設立

従来、医療・保健等における外国人支援体制については、協会では医療通訳の養成・ボランティアの紹介を行っていましたが、善意に依存し医療通訳の地位が確立されない状況があったので、有志らと「メディアサポふくい」を設立し、現在では外国人患者拠点病院3病院と提携し、医療通訳の派遣や説明文書の翻訳などを行っています。協会事業としては、引き続き医療通訳の養成講座と医療・保健・福祉従事者を対象とした対応セミナーを開催しています。

外国人にとっても安心・安全な街は、行政などの公的な支援だけでなく、自助・共助が強い地域だと最近感じています。共生は強制ではなく、お互いが主体的になり、国籍や文化、信仰などの違いに関わらず、何かあれば自然とお互いに手を差し伸べたいと思える地域にしたいです。

⑪ 公益財団法人 三重県国際交流財団 上原 ジャンカルロ



日系3世ペルー人。日本での滞在期間は1993年から1996年の約3年間と2006年から現在までの17年間で計20年になりました。一度目の滞在期間中に家族は、災害（阪神淡路大震災）や医療（治らない兄弟の病気）などの場面で日本語が理解できず、いろいろな壁にぶつかりました。そのため、親は不安と悔しさに絶えられず、家族揃って帰国することになりました。

母国では、国際経営学を勉強し、貿易業務に従事していましたが、就職活動をしていたとき、私の名前を見て、面接官から「君、もしかして日系人？」と聞かれ、ペルーでは日本人、日系人に対するイメージが良く、尊敬されていることに気づかされました。

2006年に再来日しましたが、湖南省国際協会に在職していた2011年6月に、JIAMで開催された「外国人スタッフエンパワーメント研修」に参加し、研修を企画された時氏、講師を務められた高木氏、田村氏、土井氏の話を知り、多文化共生マネージャーの活動に関心を持ち始めました。

また、当時の研修に参加された全国の外国人スタッフともネットワークを築き、今も情報交換やお互いに相談しあったりしています。

その後、現在の（公財）三重県国際交流財団に転職し、2023年に10年目を迎えました。この節目を迎える前の2022年にタブマネとして認定されるためのコースを受講しました。同期のタブマネは様々な分野で多文化共生事業に関わっており、メール、ラインで共有される情報は本当に参考になります。

現在私は、災害や医療現場での外国人の不安を解消することや、いつか私たち日系ペルー人も日本社会に貢献できるようになり、イメージがプラスになることを目指して日々活動しています。

この活動にタブマネ研修で得た知識、ネットワークを活かしたいと思います。

⑫ 公益財団法人 大和市国際化協会 小西 永里子



高校生の頃、日本語教室でボランティアを始めたことがこの道に進むきっかけになりました。

私より年下の日系ブラジル人の女の子が、工場で残業に追われていることを知り、農家のフィリピン人のお嫁さんの寂しさに触れ、日本語を教えることよりも、「いったいこれってどういうこと？」と、よくわからないものに対して、ぷんすかぷんすか憤慨していました。

勤続10年になろうかという、リーマンショックで味わった無力感（市内に暮らす日系ペルー人がどんどん解雇されていったのでした）を乗り越え、楽しくお仕事しつつも、今思えば若干倦んでいたのかも・・・といった頃に、東日本大震災が起きました。

多文化防災・災害対策について手探りで勉強を始めたときにアドバイスを下さった先輩方を追って、第15期（2012年第2期）の多文化共生マネージャー養成講座を受講するに至りました。

あの10日間、それまでの自分の経験が整理されて目からうろこが落ちた後の視界のクリアさたるや、今振り返ってみてもほんとに驚いたなあと忘れられないでいます。

今も憤慨と無力感は避けては通れませんが、昔とは比べものにならないくらい多くの人に関心を持って協力してくれることに心強さを感じ、同じように奮闘しているタブマネの皆さんの姿に励まされ、何か少しでも自分に出来ることがあって良かったと思えることも増えてきました。

大和市は、人口の約3.3%、8,100人強の外国籍市民が住民登録をされています。今まで一人ひとりの顔や名前を思い浮かべながら仕事をするが多かったなあという反省がありますが、これからは、一人ひとりの幸せをどのように地域全体の住みやすさにつなげていけるのか、どちらも大切にしながらも、より広い視点をもって事業を進めて行けたらと思っています。